

# 水稲病害虫防除対策（7月）

## 1 いもち病（穂いもち）

- (1) 病害虫防除所ホームページ (<http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>) では、6月から8月までBLASTAM（ブラスタム）による葉いもち感染好適条件の出現状況を掲載しています。感染好適条件が広範囲で断続的に出現が認められると、その7～10日後に葉いもちがほ場で確認される全般発生開始期となり、例年7月上旬に認められます。
- (2) 葉いもちは、感染好適条件の出現時に感染しやすく、感染後7～10日後に病斑が認められるため、7～10日間隔で感染好適条件が出現した地域では葉いもちの多発生に注意してください。
- (3) 葉いもちの発生が認められる場合には、穂いもちへの伸展を防ぐため、早急に茎葉散布剤による防除を実施してください（表1、3）。
- (4) 水面施用剤による穂いもち防除を実施する場合は、各薬剤の施用適期を逃さずに施用してください（表2）。
- (5) 散布剤による穂いもち防除を実施する場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回散布を基本に実施してください（表1、3）。その後多発するおそれがある場合は、さらに傾穂期に追加散布を行ってください。
- (6) 薬剤防除の実施に当たっては、以下のことに注意してください。
  - ア 耐性菌の出現を防ぐため、同じ系統の薬剤の連用はさけてください。特にQoI剤（表中の薬剤系統C3）は、県内でも耐性菌の発生が確認されています。QoI剤の使用は育苗箱施用薬剤を含めて年1回までとしてください。
  - イ 水面施用剤は湛水状態にして所定量を均一に施用してください。施用後は7日以上止水状態を保ち、落水や掛け流しは行わないでください。
  - ウ アミスターエイトはリンゴの一部品種に薬害を発生させる場合があるため、リンゴにかからないよう注意してください。
  - オ ビームゾルやビームバリダゾルは野菜類の幼苗、ナシ、キクにかからないよう注意してください。
  - エ パック剤やジャンボ剤は藻や浮草で拡散が阻害される場合は使用をさけてください。

表1 いもち病（葉いもち、穂いもち）の防除薬剤（茎葉散布剤）

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の使用 回数
アミスターエイト	アゾキシストロビン	C3	収穫14日前まで	1,000～1,500倍	3回以内
カスミン液剤	カスガマイシン	D3	穂揃期まで	1,000倍	2回以内
ノンブラス粉剤DL	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
	フェリムゾン	U14			
ノンブラスフロアブル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	フェリムゾン	U14			
ビームゾル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	1,000倍	3回以内
フジワン乳剤	イソプロチオラン	F2	収穫14日前まで	1,000倍	2回以内
ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
	フサライド	I1			
ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍	2回以内
	フサライド	I1			

注) 液剤、乳剤、フロアブル剤は10a当たり140～150L散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表2 穂いもちの防除薬剤（水面施用剤）

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
キ タ ジ ン P 粒 剤	I B P	F 2	出穂 10 日前	3～5 kg	2 回以内
コ ラ ト ッ プ 粒 剤 5	ピ ロ キ ロ ン	I 1	出穂 15～10 日前	3～4 kg	2 回以内
コ ラ ト ッ プ 1 キ ロ 粒 剤 1 2	ピ ロ キ ロ ン	I 1	出穂 15～10 日前	1～1.5kg	2 回以内
コ ラ ト ッ プ ジ ャ ン ボ P	ピ ロ キ ロ ン	I 1	出穂 15～10 日前	小包装 (パック) 10～13 個 (500～ 650g)	2 回以内
フ ジ ワ ン 粒 剤	イ ソ プ ロ チ オ ラ ン	F 2	出穂 10～30 日前 (収穫 30 日前まで)	3～5 kg	2 回以内

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

表3 いもち病（葉いもち、穂いもち）の防除薬剤（無人航空機散布）

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
ア ミ ス タ ー エ イ ト *	ア ズ キ シ ス ト ロ ビ ン	C 3	収穫 14 日前まで	8 倍、0.8L	3 回以内
ビ ー ム ゴ ー ル	ト リ シ ク ラ ゴ ー ル	I 1	収穫 7 日前まで	6～8 倍、0.8L	3 回以内
ビ ー ム バ リ ダ ゴ ー ル *	ト リ シ ク ラ ゴ ー ル	I 1	収穫 14 日前まで	8 倍、0.8L	3 回以内
	バ リ ダ マ イ シ ン	U18			
フ ジ ワ ン 乳 剤	イ ソ プ ロ チ オ ラ ン	F 2	収穫 14 日前まで	8 倍、0.8L	2 回以内
ブ ラ シ ン ゴ ー ル	フ ェ リ ム ゴ ー ン	U14	収穫 7 日前まで	8 倍、0.8L	2 回以内
	フ サ ラ イ ド	I 1			
オ リ ゼ メ ー ト 粒 剤 2 0	プ ロ ベ ナ ゴ ー ル	P 2	収穫 14 日前まで	1 kg	2 回以内
コ ラ ト ッ プ 粒 剤 2 4	ピ ロ キ ロ ン	I 1	出穂 30～5 日前	0.5kg	2 回以内
コ ラ ト ッ プ 1 キ ロ 粒 剤 1 2	ピ ロ キ ロ ン	I 1	出穂 30～5 日前	1 kg	2 回以内

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

注) \*は紋枯病との同時防除に使用できる薬剤を表す。

## 2 紋枯病

- 前年に病斑上に形成された菌核が地表に落下、越冬して第一次伝染源になるため、昨年発生が多かったほ場や風下の畦畔沿いに発生しやすい病害です。
- 幼穂形成期頃に水際の葉鞘に発病し、上位葉鞘に病斑が伸展します。
- 密植や窒素成分の多いほ場では発病しやすくなります。
- 高温多湿が続くと上位葉鞘への伸展が激しくなり、第3葉鞘以上の葉鞘に発病して葉が枯れると減収等に結びつきます。また、茎が弱くなるため倒伏しやすくなります。
- 出穂後も高温多湿が続く場合は、止葉葉鞘に伸展し、穂が枯れるおそれがあります。
- 水面施用剤による防除を実施する場合は、各薬剤の施用適期を逃さずに施用してください（表4）。
- 散布剤による防除は、上位葉鞘へ伸展する前の穂ばらみ期に実施してください。その後多発するおそれがある場合は、穂揃期に追加散布を行ってください（表5）。
- アミスターエイトはリンゴの一部品種に薬害を生じる場合があるため、リンゴほ場の付近で使用する場合はリンゴにかからないよう注意してください。

表4 紋枯病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
水面 施用剤	モンガリット粒剤	シメコナゾール	G 1	出穂 28～14 日前	3～4 kg	2 回以内
	リンバー粒剤	フラメトピル	C 2	出穂 30～10 日前	3～4 kg	2 回以内
散布剤	アミスターエイト	アズキシストロビン	C 3	収穫 14 日前まで	1,000～1,500 倍	3 回以内
	バリダシン液剤 5	バリダマイシン	U18	収穫 14 日前まで	1,000 倍	5 回以内
	モンカットファイン 粉剤 20DL	フルトラニル	C 2	収穫 14 日前まで	3～4 kg	3 回以内

注) 液剤、フロアブル剤は10a 当たり 140～150L 散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

### 3 稲こうじ病

- (1) 本病は、穂ばらみ期に低温、降雨が多い場合や窒素過多のほ場で発生しやすい病害です。
- (2) 常発ほ場では、土壤中に原因菌が常在しており、田植後早い段階からイネの植物体に侵入し、穂ばらみ期に降雨や日照不足などの発生を助長する条件が揃うと発病します。天候予報などで穂ばらみ期に降雨が予想される場合には出穂前に薬剤防除を実施してください（表5）。
- (3) 銅を含む薬剤は葉が濡れている場合は葉害を生じやすいため、注意してください。また、銅を含む薬剤を散布する場合は出穂10日前までに施用してください。

表5 稲こうじ病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
水面 施用剤	モンガリット粒剤	シメコナゾール	G 1	出穂 21～14 日前	3～4 kg	2 回以内
散布剤	Z ボルドー粉剤DL	銅	M 1	出穂 20～10 日前	3～4 kg	—

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

### 4 イネアオムシ（フタオビコヤガ）

- (1) 本種は多化性で、本県では例年7月下旬と8月下旬に発蛾最盛期になっており、その10日後頃から幼虫の被害が目立ってきます。特に、穂ばらみ期から出穂期にかけて幼虫の被害が大きくなり、止葉が食害されることもあります。
- (2) 窒素過多による過繁茂なほ場、幼虫期に曇雨天が多い年、山間地など風通しの悪い地域などでは発生が多くなりやすいので、注意してください。
- (3) 薬剤防除は、7月下旬～8月中旬にかすり状の食害が確認されたら行ってください（表6）。

表6 イネアオムシの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫 21 日前まで	2,000～4,000 倍	2 回以内

注) 乳剤は10a 当たり 140～150L 散布する。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

### 5 ヒメトビウンカ

- (1) 本種はイネ縞葉枯病などのウイルス病を媒介するので、これらの病害が発生しているほ場では本種の防除を行ってください（表7）。
- (2) イネ縞葉枯病の感染時期は、定植から幼穂形成期までのため、6月下旬から7月上旬に本種の防除を行ってください。特に麦畑付近の水田では早い時期から侵入するので、早めの防除を行ってください。

表7 ヒメトビウンカの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり使用量	本剤の 使用回数
スミチオン乳剤	M E P	1 B	収穫 21 日前まで	1,000 倍	2 回以内
マラソン乳剤	マラソン	1 B	収穫 7 日前まで	2,000 倍	5 回以内

注) 乳剤は10a 当たり 140～150L 散布する。

注) マラソン乳剤は「ウンカ類」での登録。

注) 使用回数はその剤の使用回数であり、使用する際には有効成分ごとの総使用回数を確認すること。

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農林水産省のホームページ (<https://pesticide.maff.go.jp/>) 等で最新の登録内容を確認してください。（記載中の登録内容は令和5年6月27日現在）